



## ドイツ

地球環境や動物愛護への問題意識から、肉や魚、乳製品などを避ける完全菜食主義の「ビーガン」が欧米で定着して久しい。ドイツでは、ビーガンから派生した「イエーガン」が注目を集めている。

イエーガンは、菜食中心でありつつ、自ら野生動物を狩り、さばき、調理した肉であれば口にする人々を指す。ドイツ語で猟師を意味する「イエーガー」から転じた造語だ。首都ベルリン近郊エバースワルデで昨年12月、イエーガンを体験する講座があると聞き、現地を訪ねた。

### ■「イエーガン」

見渡す限り雪化粧した森に集まつたのは、ドイツ人の男女約15人。主催したのはイエーガンを実践して3年ほどになり、森でアウトドア学校を運営するモリー

ス・レッセルさん(42)だ。前日に自ら銃で仕留めたシカをトラックの荷台から降ろし、参加者の前に運んで雪の上にドカッと横たわらせると語り始めた。

「私」はきょうも注意深く、闇夜が森を包んだ後に繩張りに出た。危険を見逃さぬよう、慎重に、静かに。向こうの高速道路などには近づくまい。小さな丘を登った。「引き返せ」。直感がそう告げた。破裂音と閃光が走った。「私」は木にたたきつけられ、崩れ落ちた。

イエーガンは商業的な畜産を否定しつつ、野山で増えすぎた野生動物の食害などにも目を向ける。狩猟に参画して殺生を引き受け、森の生態系維持に貢献する

### ■生態系維持

年半で、動物を仕留め、食べる中で、動物を仕留め、食べる」とことを目指す。

イエーガンさんは2019年に南米のアマゾンで先住民と半年間、都会とは無縁の生活を送った。自然と一緒に暮らしながら、動物を仕留め、食べる



ことは自然サイクルの一部と実感した。帰国後、郊外で自然と共に生きるイエーガン生活を送るようになった。

### ■倫理性追求

参加者はレッセルさんの言葉にうなずき、横たわるシカをなでた。道具を使って皮と肉を引き裂き、内臓を傷めずに取り除いてジビエ肉に仕上げた。細切れに刻んだ肉を木のプレートに並べ、車座になつて「我々は『あなた』が与えてくれた肉に感謝する」と祈りをささげ、たき火にくべた。



上 レッセルさん(手前)からシカ肉のさばき方の手ほどきを受ける参加者たち(昨年12月1日、独エバースワルデで)

下 調理の前に感謝の祈りをささげるレッセルさん(左から3人目)ら=いずれも中西賢司撮影



## 環境意識 ビーガンから派生